

## 雨竜沼湿原の絶滅危惧植物

札幌市 高橋 英樹・雨竜町 佐々木 純一

縁あって雨竜沼湿原の植物リストを共同で作ることになった。高橋が湿原に通い始めたのは1998年の7月からだった。その年は4回、翌99年は5回通った。湿原で調査した日数は延べ12日となった。一方、佐々木は78年以来通いつめ、延べ日数は100日にのぼる。この成果は佐々木(1998)で発表している。それでもまだ登るたびに小さいが何か新しい発見をし、互いに連絡を取り合っている。

植物リストはほぼ出来上がり、来年の補足調査を残すだけになったので、本稿では雨竜沼湿原(近接する群馬湿原を含み、途中の登山道や周辺山域は今回は触れない)に生育する絶滅危惧種——植物版レッドリスト掲載種(環境庁自然保護局野生生物課1997)とこれに準ずる種について紹介する。今後の雨竜沼湿原の保全措置において十分な配慮がなされる事を期待したい。以下、植物の順番は植物目録(環境庁自然保護局1987)に従い、科名と植物版レッドリスト(1997)でのランク(CR——絶滅危惧I A類、EN——絶滅危惧I B類、VU——絶滅危惧II類)を括弧内に補足し、雨竜沼湿原での自生状況について説明した。現存株数はおおまかな範囲を示し、数十とは10から100の範囲、数百とは100から1000までの範囲、数千とは1000以上の範囲を意味している。

1. ヤチスギラン(ヒカゲノカズラ科、ランクなし):ミズゴケ湿原に葡萄状に生育するシダ植物。低地のミズゴケ湿原が開発により失われるに従い、北海道での生育地は確実に減少している。植物版レッドリストに掲載されていないが、北海道の現状から見てなんらかのランクに位置付けるべきと思いここに載せた。雨竜沼湿原と群馬湿原のミズゴケ湿原にややまれに生育し数十株程度。

2. ヒメミズニラ(ミズニラ科、VU):池塘に沈水状態で生育するシダ植物。一見するとミクリ属の実生のようにも見えるので注意しないと見のがす。北海道では貧栄養の湖沼数カ所から報告されている。雨竜沼湿原からは高橋(1998)が報告し、10カ所ほどの池塘に数十株生育する。

3. クロバナハンショウヅル(キンボウゲ科、EN):ややツル状に他植物にからんで生育する多年草。北海道各地に点々と分布する。生育地は湿原や明るく開けた落葉性の低木林林床などである。雨竜沼湿原では全域に多く、数百株はあり、湿原全体が保全される限りここでの絶滅のおそれはない。

4. ネムロコウホネ(スイレン科、VU):湖沼に生育する浮葉性の水草。北海道各地に分布するが開発により生育地が少なく

なっている。以下の項でも述べるように、雨竜沼湿原ではオゼコウホネ(“ウリュウコウホネ”)が多く、ネムロコウホネはこれまで2カ所の池塘でしか見つかっておらず数十株程度である。

**5. オゼコウホネ** (スイレン科、VU)：湖沼に生育する浮葉性の水草。北海道では雨竜沼湿原や道北オホーツク海側から記録されている。ネムロコウホネの変種とされ、柱頭盤が赤く色付くのが特徴。雨竜沼湿原では子房も赤味がかり、熟すころにはかなり赤黒い色になるため“ウリュウコウホネ”の裸名がある。雨竜沼湿原ではこのウリュウ



図1 オゼコウホネ(“ウリュウコウホネ”) (8月29日、1999年)

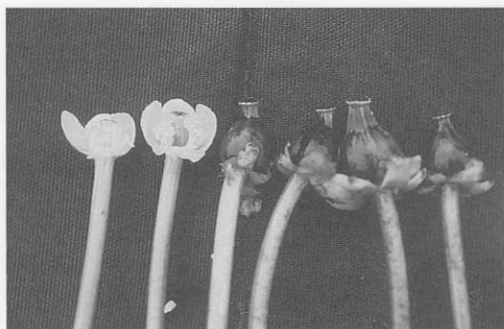


図2 オゼコウホネ(“ウリュウコウホネ”)の花、果実 (8月12日、1998年)

ウ型がほとんどで、むしろ真正のオゼコウホネは稀である。ただし子房の色には変化があり、オゼコウホネにつながるようにも見え、ここでは広義のオゼコウホネとして扱っておく。雨竜沼湿原では池塘にごく普通であり数千株はある。(図1、2)

**6. エゾベニヒツジグサ** (スイレン科、VU)：湖沼に生育する浮葉性の水草。北海道では雨竜沼湿原のほか、道東や道北の湖沼にやや稀に分布する。ヒツジグサの花の中心が赤色を帯びたもので、変種ランクで認められている。雨竜沼湿原ではヒツジグサは見ず、このエゾベニヒツジグサばかりのようだが、中心の色はやや変化がある。雨竜沼湿原の池塘に大変多く数千株ある。

**7. オオバタチツボスミレ** (スミレ科、VU)：湿原の周辺や湿った林縁などに生育するやや大形のスミレ属植物。雨竜沼湿原では湿原周辺や中央部木道ぞいに生育し比較的普通にある。数百株はある。

**8. タニマスミレ** (スミレ科、CR)：湿原に生える小形のスミレ。北海道では羊蹄山、余市山系、大雪山系、知床山系などから報告がある。雨竜沼湿原では一カ所に群生して数十株ある。

**9. エゾゴゼンタチバナ** (ミズキ科、EN)：湿原周辺の湿草原に生育する。北海道各地にあったが、現在は道東や道北以外ではではかなり減少している。群馬湿原に数十株生育する。

10. ヒメタヌキモ (タヌキモ科、VU) : 食虫性の水草。北海道各地の湖沼や池塘にある (小宮ら 1997) が、開発などにより少なくなっている。雨竜沼湿原では池塘の水の中や干上がった泥上など、所々で見られる。雨竜沼湿原ではまだ花をつけた個体を見ておらず数十株程度。

11. カキツバタ (アヤメ科、VU) : 日当たりのよい湿地に生育する多年草。北海道各地に見られる。雨竜沼湿原ではヒオウギアヤメが普通で、ときにこのカキツバタが見られる。自生個体は数百株程度。

12. ホシクサ属の1種 (ホシクサ科、ランクなし) : ミズゴケ湿地から池塘ふちの泥上に生育する。花が2数性の点ではカラフトホシクサに似るが、雌花のがく片は1枚で先が2裂しクシロホシクサにも似、まだ種類の特定ができないもので雨竜沼湿原で99年に見つかった。カラフトホシクサ、クシロホシクサともに情報不足種にランクされているので、本種も少なくとも絶滅危惧植物として位置づけるべきものである。数百株ある。

13. ホソバウキミクリ (ミクリ科、VU) : 池塘に生育する浮葉性のミクリ属植物。北海道の数カ所の山岳池塘から報告がある。高橋・佐々木 (1998) が次の種類とともに雨竜沼湿原から報告した。雨竜沼湿原の20以上の池塘に生育するが開花するのは数池塘であり、開花株は数十株程度である。

14. タマミクリ (ミクリ科、VU) : 高橋・佐々木 (1998) で同様に報告。北海道各地に生育する。雨竜沼湿原ではペンケペタン川で見られ、通常抽水状態、ときに沈水状態でも花をつけるミクリ属植物。雨竜沼湿原では数十株見られる。

15. ウキミクリ (ミクリ科、EN) : 池塘に生育する浮葉性のミクリ属植物。北海道での初記録として高橋・佐々木 (1998) が報告した。その後、写真家の梅沢氏が雷電山の池塘でも見ていたとの事で、標本を頂いた。東北地方から北海道の日本海側の山地湿原を点々と分布しているようである。雨竜沼湿原ではまだ1カ所の池塘でしか確認しておらず数株程度である。(図3)

16. カラフトカササゲ (カヤツリグサ科、ランクなし) : 池塘の縁に抽水状に生育するスゲ属植物。最初、筑波大学の路川氏により気付かれ (路川 1989)、後に路川・滝田 (1997) により再度報告された。日本では雨竜沼湿原以外では見つかっていない。レッドリストには含まれていないが、近縁

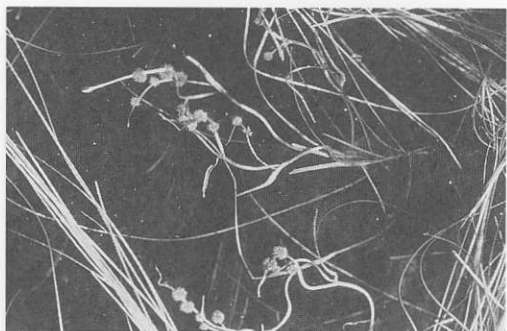


図3 ウキミクリ、葉は浮葉状であり花序がやや抽水する (9月18日、1999年)

のヌマスゲが情報不足種であること、日本では雨竜沼湿原からしか報告がないことから、絶滅危惧種に含めるべきものである。雨竜沼湿原、群馬湿原では比較的普通であり数百株ある。(図4)

**17. コアニチドリ** (ラン科、VU) : ミズゴケ湿原に見られる多年草。北海道では数カ所から報告があり少ない。雨竜沼湿原でも非常に少なく数株程度。

**18. トキノウ** (ラン科、VU) : ミズゴケ湿原に生育する多年草。北海道各地から報告がありコアニチドリほど稀ではない。雨竜沼湿原では数十株ほどある。

以上、雨竜沼湿原に見られる絶滅危惧植物15種類とそれに準ずる植物3種類の計18種類を取り上げて解説した。なお湿原全体の植物リストは現在準備中である。

湿原への立ち入り許可に際してお世話になった関係機関に感謝いたします。

## 文 献

環境庁自然保護局野生生物課 (編). 1997. 植物版レッドリスト. 環境庁、東京.  
小宮定志・外山雅寛・柴田千晶・勝俣員伊. 1997. 北海道産の食虫植物. 日本歯科大学紀要 (一般教育系) (20) : 153-188.  
路川宗夫. 1989. 我が採集紀行(2)「北海道



図4 カラフトカサスゲ  
(8月29日、1999年)

篇(1) : 駒ヶ岳、羊蹄山、ニセコアンヌプリ山、暑寒別岳、夕張岳」. 食虫植物研究会会誌 40 : 104-108.  
路川宗夫・滝田謙讓. 1997. カラフトカサスゲ、トナカイスゲとの出会い. すげの会会報(7) : 9-12.  
佐々木純一. 1998. 改訂版、花紀行・雨竜沼湿原. 206 pp. 自費出版.  
高橋英樹. 1998. 北海道雨竜沼湿原からヒメミズニラを記録する. 水草研究会会報 65 : 17-18.  
高橋英樹・佐々木純一. 1998. 北海道雨竜沼湿原のミクリ属3種. 植物地理・分類研究 46 : 211-212.